

## 共同研究の目的と方法

関根 達人\*

2021年7月、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が世界文化遺産に登録された。青森県内には構成資産に選ばれた8つの遺跡の他にも学術的に重要な縄文遺跡が多数存在する。今や青森県は縄文の遺跡の宝庫として世界的に認知されつつあるが、一方で縄文文化や社会の実態解明はそれほど進んでいとは言いがたい状況にある。縄文文化が多様な地域性を示しながらも日本列島に広く展開を見せるなかで、北日本の縄文遺跡群の特質を解明することは、縄文文化の歴史的評価に関わる重要な問題であり、北太平洋の狩猟民文化の解明にもつながると考えられる。

北日本の縄文文化や社会の推移を検討する上で、青森県埋蔵文化財調査センターにより西目屋村の津軽ダム関連工事で発掘調査された、世界遺産白神山地に隣接する縄文遺跡群は、一定の地域内に存在する草創期から晩期までの縄文遺跡が悉皆調査された点で、絶好の研究対象といえる。

考古学と自然科学の緊密な共同研究に基づいて、白神山麓の縄文遺跡群から出土した遺構・遺物を分析することにより、草創期から晩期に至る縄文文化の歴史的変遷と、地域間交流の実態を解明し、縄文文化の魅力を世界に向けて発信するための確固たる基盤をつくることが期待される。

こうした視点に立ち、令和2～4年度の3年間、関根を研究代表者として、「考古学と自然科学の融合による北日本縄文文化の研究」という課題で、公益財団法人高梨学術財団から特定研究助成をうけ、弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センターと青森県埋蔵文化財調査センターは、西目屋村の津軽ダム関連工事で発掘された縄文遺跡群から出土した遺物に関して共同研究を行ってきた。

具体的な研究項目と担当者は以下の通りである。

1. 土器の胎土分析（関根達人・柴正敏）
2. 動植物遺存体の分析（上條信彦）
3. 漆製品の分析（片岡太郎）

本研究の特長は、土器・動植物遺存体・漆製品などの出土遺物に関して、弘前大学が誇る最新の自然科学的手法による分析を行い、ミクロな視点から原産地（製作地）や製作技術を解明するという手法にある。本研究は、縄文のムラの実相と、縄文社会における物や技術の保有状況（物や技術の保有状況にどの程度の偏りがあるのか？）を明確化し、階層性や専業性など課題となっている縄文の社会組織の在り方に迫ることを目指している。本研究は、縄文文化研究のネックとなっている社会組織の解明に新たな道を拓き、人類史上、縄文文化がいかなる意味を持っていたかを議論するための材料を提供できるであろう。